

<原 著>

Facilitated Communication (FC) と表出援助法の比較研究

—— 肢体不自由, 重複障害のある児童生徒への効果を求めて ——

落合 俊郎*・小畑 耕作*・井上 和久*

2014年8月のNHK特集番組「君が僕の息子について教えてくれたこと」が2014年度文化庁芸術祭テレビ・ドキュメンタリー部門で東田直樹氏が大賞を受賞した。その映像では、話すことができない重度の自閉症者の書字のタイピングやポインティングによるコミュニケーションの様子が放送され、介助なしでのコミュニケーション・ボードのポインティングやキーボードによるパソコン入力でのコミュニケーションする様子が映し出されている。しかし、それまでの長い、厳しい過程については余り知られていない。彼だけではなく、多くの音声言語はないが介助付コミュニケーション: Facilitated Communication, 表出援助法, 筆談援助法などと呼ばれる方法によってコミュニケーションができる事例がある。しかし、介助付きということで、介助者が書いたのか本人が書いたのかという真贋論争も幾度かあり、厳しい議論を呼んだ。本稿ではこれらの方法についての歴史を振り返り、自閉症だけでなく、肢体不自由, 重複障害のある子どもたちの支援方法としての可能性と課題について考察した。

キーワード: Facilitated Communication, 表出援助法, 自閉症児, 肢体不自由児, 重複障害児

I. はじめに

重度の自閉症の東田(2007)による「自閉症の僕が跳びはねる理由」が2013年に英語に翻訳された。2014年8月のNHK特集番組「君が僕の息子について教えてくれたこと」が放送され2014年度文化庁芸術祭テレビ・ドキュメンタリー部門で大賞を受賞した。その後2016年12月11日にNHKスペシャル「自閉症の君が教えてくれたこと」が放送された。コミュニケーション方法は介助なしでコミュニケーション・ボードの指差しやキーボードによるパソコン入力、発話による様子が放映されている。しかし、放映された状況が突然可能になったわけではなく、そこまでたどり着けるまでの長い道のりについては余り知られていない。本稿では、介助付きコミュニケーションがどのように行われ、やがては介助なしで行うコミュニケーションとして成立できるのか、その背景について明らかにする。一般には、言葉の理解→音声による発話→読字・書字というのが定型発達の過程であるが、発話がない状態で書字・読字を行い、それも、特定の介助者が触れることによってコミュニケーションが可能になるという状況、問題行動や不適応行動などから推測される発達状

況と介助付きコミュニケーションによる書字から推測される内面との大きなギャップから、幾度も真贋論争が繰り返されてきた。ここで、第二・第三の東田氏を育てるためにも、これらの方法の歴史、実践、課題について明らかにすることを目的とする。また、国連障害者の権利に関する条約「第二条 定義」において、「合理的配慮」とは、「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。」と定義されている。均衡を失した過度の負担を課さないこの方法が学校現場で要請される可能性に向けて、整理しておく必要があるのではないかと考える。

II. 方法

介助付きコミュニケーションについては、栗田(2008, 2014)が障害学の立場から、中村(2013)がジャーナリストの立場から、河野(2015)は哲学から説明している。一部重複する部分があるが、本研究は次の方法によって教育実践の立場から行う。具体的には、介助付きコミュニケーションに関わる歴史の文献研究、

* 大和大学教育学部

著者の一人の落合がこれまで行ってきた実践資料を再検討し、さまざまな名称で呼ばれている介助付きコミュニケーション方法の基本的なメカニズムをまとめる。さらに自閉症だけでなく、肢体不自由、重複障害のある児童生徒に対する応用の可能性についての検討を行う。また、音声言語がないが書字・読字によるコミュニケーションを行う人々の運動や言語の特性はどのようなになっているのか、当事者の「ことば」から考察する。

Ⅲ. 結果

1. 介助付きコミュニケーションの歴史について

(1) 若林論文 (1973) 精神神経学雑誌 第75巻 第6号 pp.339-357

現在、介助付きコミュニケーションの初期の論文の1つとして手に入るのは、若林 (1973) の「書字によるコミュニケーションが可能になった幼児自閉症の1例」である。1955年生まれの男児について、1959年の対象児を4歳から17歳までの13年間フォローアップした報告である。折れ線型自閉症といわれるタイプで、3歳までは顕著な遅れは見られなかった。10歳2ヶ月から文字カードで文字指導を開始。12歳9ヶ月時、母親のみであるが、対象児の手に触れることのみで「筆談」が可能となり、13歳2ヶ月のとき「十二月十七日 火曜日 よるねれなかったので頭がいたかったからおべんきょうしたくなかった。先生におべんきょうせん子があっこうにこんでもいいと行ってしかられた。かえりにみちにすわって、お姉ちゃんにおいでいかれた。わるい子でした。ごめんなさい」と書字を行っている。13歳0ヶ月で、“どうしてお母さんが手にさわってもらおうとよく書けるの、そのわけを教えて”という問いに対して、「さわっていてもらおうと安心していれる。(Fig. 1)、と書いている。介助ありの状態では算数は普通児と同年齢の能力を示した。当時アポロ11号の乗組員の名前も書字によって答え、どこで知ったかとの質問に対して、テレビで見たと答えたが、テレビを見ている様子は「テレビはじっと見ておらず、無関心のようにみえるが、みたりきいたりしているらしい。p.314」と記載されている。15歳1ヶ月のとき、取組みの4年11ヶ月目に介助なしで筆談を行っている。担任教師が「自分から何かするようになりたいものだ。指令がないと動かないのはロボットだ」と書いたのに対して「ぼくはロボットでないですよ。生きています。」(Fig. 2)と書字で答えている。この論文が

出されたときは、17歳になっていたが、「人前では無意味な奇声を発したり、飛び跳ねたり、床に寝転がったりするという、本児の書く文章からは想像できない程のギャップがある。p.352」と述べている。具体的な指導方法については詳しく記述されていない。

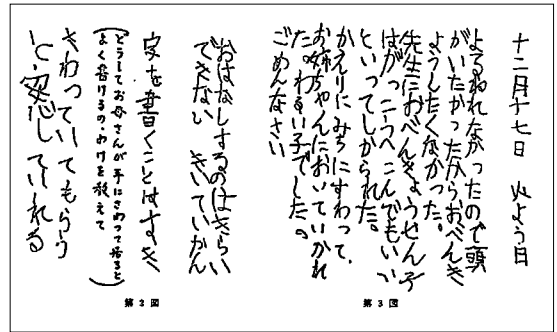


Fig. 1 母親が対象児の手に触れた状態で書いた文字 (若林, 1973, p.345)

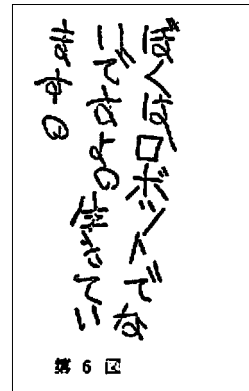


Fig. 2 介助なしで書いた文字 (若林, 1973, p.351)

(2) Oppenheim, R. C. (1974) Effective teaching methods for autistic children, Charles C Thomas・Publisher

Oppenheim, R. C. は、自閉症児の母親であり、この本の執筆者でもある。Oppenheim, R. C. (1974, p.54) はその手法について述べている。以後行われるさまざまな介助付きコミュニケーションの実践とほとんど同じである。対象者は椅子に座わり、介助者が横に座り、リラックスした状態で、介助者が対象者の手に軽く触れて書字の支援を行う。徐々に(数十日、あるいは数年かかることもある)以下のように介助を間接的にしていく、手の甲から手首、二の腕、肩、または書字の動作に全く関係ない脚に触れるだけのように、ひとりで書字が行われるようにしていく。Oppenheim, R. C. (1974) は、自閉症児はいわゆる精神的・心理的な特

徴だけでなく、運動障害もあり、手で新しい動きを行うときに困難性が生ずるのではないか。そして、手の動きに限定した Apraxia (失行症)があるのではないかと述べている。ここではハンド・ライティングで書字の指導を行っているがタイプライターによる可能性も指摘している。介助付きで書字が可能になった2人の音声言語がない自閉症男児を紹介している。触れると書字が可能になることについて “I can't remember how to write the letters without your finger touching my skin” と書字したと述べている (前掲書 p.54)。Oppenheim R. C. は、1971年に The Rimland School for Autistic Children を創設し、この学校は現在も存続している。

(3) Crossley, R. (1993) Facilitated Communication Training, Teachers College Press.

介助付きコミュニケーションを Facilitated Communication (以下、FC とする) と名付けたのは Crossley, R. である。1992年彼女が米国シラキュース大学に客員研究員として研究生活を送ったとき、Biklen, D. と会い、FC が米国に広まった。その方法について、以下のように記述されている。援助の仕方は、手の甲に触れることから始まり、手首そして肘へと変えていく。次に肩へと移動し、介助者は手を対象者の肩に置いたり、鉛筆を肩に触れさせて置くだけで、最終的には、いかなる身体的援助がなくともタイプすることができるようになる場合があるとしている。Fig. 3でFCにおける支援の間接化のプロセスを示した。典型的には、ファシリテーター (以下、介助者とする) は、対象者が人差し指で指さす様に援助する。もし必要であれば、指さしができるように完全に手で覆うこともある。腕を後ろにちょっと引ききみにして、腕を安定させる。この時、対象者が常に、対象物のほうを見ているかどうか視線に注意する。①の段階は介助者が対象者の指を握って、キーボードに人差し指で触れようとしている場面。②では、介助者の手が、手指から肘を支えてタイピングしている様子。③では二の腕を④では肩に触れている様子である。この方法で、自閉症児、脳性まひ児、ダウン症児やその他の発達障害のある人々が文レベルのコミュニケーションが可能になったと報告している。Crossley (1994, p.138) は Facilitation を行うときの基本的な留意点を述べている。1. 視線に注目すること：FCを行うとき、対象者がコミュニケーション・ディスプレイまたはキーボードを注視しているかどうかをチェックすること。介助の軽減を図る場合は、目と手の協応と自己調整ス

キルが必須である。2. 出力された文字に留意すること：もしメッセージを得ることができなかったら、そのことを対象者(コミュニケーションエイドの利用者)に知らせる。対象者が母音のない子音のみの羅列をタイプしたら、それを削除し、意味が分かる直前の項目まで戻って、再スタートすることを奨励する。何を言ったらいいのか確信がもてないとき、しばしば、対象者は無意味な文字を打つことがあり、質問を簡明にし、会話をよりうまく組み立てる必要がある。3. 後ろに手を引くこと：上で述べた手指機能に対する介助者の留意点のほかに、対象者の手を前方に押しだす支援をとってしまうことがあるが、多く場合、対象者の手の動きに抵抗をかけたり、後ろに引いたり、または対象者の行動を抑制することが必要である。後ろに手を引き、抵抗をかける習慣を付けることは、対象者が意図せず回答してしまうことを防ぐのである。4. 介助の軽減について：FCのトレーニングのねらいは、独りでできるようになることである。ファシリテーションの量(介助する量と質)を頻繁に見直すこと。そして、介助はうまくいくための必要最小限にすべきである。5. 過大解釈をしないこと：例えば、母音のない子音のみの連続や動詞がない名詞のみの連続に対して、どんな意味をつけることも警戒すべきである。例えば、「ヒト ナイフ」ではなく、「ママ ミルク」のほうが正しく書字したとしがちである。6. 対象者が記述したこと全てを信じてはいけないう：障害のある人々も我々と同じように誇張したり、空想したり、嘘をつくことさえある。タイピングされたからといって、本来起こりそうもない内容の文が真実になるわけではない。以上の留意点が付記されている。

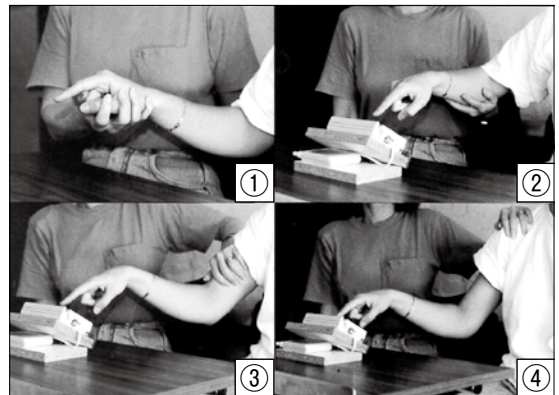


Fig. 3 Facilitated Communication によるタイピング書字 (間接化の過程) Crossley (1993) pp.60-63から抜粋

欧米の場合、タイピングによる表現が大部分を占めるので、キーボードやタイプライターのキーを打てば文字が現れる。この方法には便利さと危うさがある。日本の場合、最初は手による書字、Crossley (1994)の言い方ではFacilitated Handwritingで行うケースが多く、文字が書けない場合、殴り書きや文字にならないというかたちで現れるが、介助付きの状態でも筆跡による「鑑定」ができるメリットがある。

(4) 表出援助法 (Soft Touching Assistance) 等について

ちょうどFCがアメリカ合衆国で紹介されているころ、ほぼ同時に日本でも同様の方法がいくつか発表された。1992年には表出援助法：落合・久田 (1992)、ペンペン字：片倉 (1992)、コロロ文字：石井 (1993)、抱っこ法：筆談援助法 (高橋, 1993；筆談援助の会, 2008) が相互の情報交換がないにもかかわらず、ほぼ同時に発表した。主として指筆談といわれる方法で、人差し指で介助者の手のひらに書いたり、机に書いたりしてコミュニケーションを行う方法である。コロロ文字あるいはペンペン字といわれるものは、人差し指で素早く書くので、一般の文字とは異なり、非常に単純化された文字である (片倉, 1994)。表出援助法は、FCと出発点が異なる。最初は自閉症ではなく、肢体不自由児や重複障害児を対象として行われた。この方法が現国立特別支援教育総合研究所重複障害教育研究部と肢体不自由研究部から出発したからである。また、アメリカ合衆国におけるFCの真贋論争があることを知り、同じ轍を踏まないよう留意した。Fig. 4に示すように、肢体不自由児や重複障害児から出発したため、書字によるコミュニケーションだけでなく、体幹の動き、四肢の動き、日常生活行為、描画、書字・タイピングという広い領域にも対応できる介助方法として位置づけ、あえてコミュニケーションという言葉を選ばなかった。FCでは初期にはハンド・ライティングであったが、タイプライティング、やがてはキーボードによるパソコン入力という方法に移った。表出援助法では身体の動きや日常生活訓練の「正しい」動きを促す方法としても応用できるよう考えた。つまり、質的には異なるが肢体不自由児でも自閉症児でも運動に課題がある場合がある。例えば、コップから水を飲む動作ができない子どもがいたとする。その子どもの手を取って、コップを口元に持って行って水を飲む動作に手を添えて実施する。そのとき子どもの様々な手の動きを介助者が手で感ずることができ、口元に向かう動きとは逆の動きや震せんのような動きが合目的な動きを阻止し

ていることを知ることができる。そして、その逸脱する動きを抑えることによって、「正しい」動きが生まれ、徐々に介助を間接的にしていき、やがては独自にその動きができるようにするというものである。Fig. 4に示すように、徐々に複雑な動きに発展していき、描画や書字・タイピングへと進む場合もある。Crossley (1993) が警告したように過大評価や当事者ではなく介助者の意図が入り込まないように、Fig. 4の大きな矢印のように常に上昇 (体幹の動き→四肢の動き→日常生活行為→書字) するのではなく、同じレベルの動きのパリエーションを増やしたり、精度を高めたりする Fig. 4の小さな矢印への取り組みも行うように心がけた。

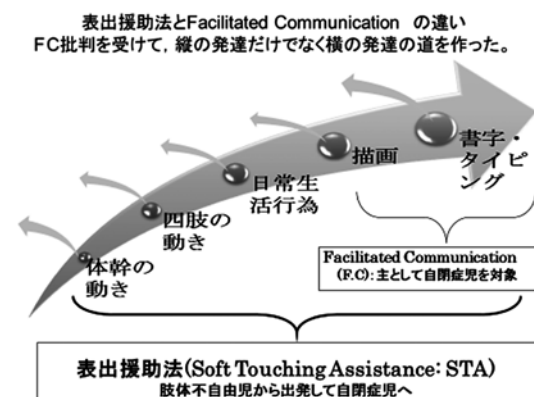


Fig. 4 表出援助法と Facilitated Communication の違い

2. 介助付きコミュニケーションの主な事例から

ここでは、公にされている文献のなかから、入手可能な文献・書籍を中心に、介助付きコミュニケーションによるエピソードを紹介する。そして、音声言語がないが読み書きができる人々についての心理、言語、運動の状況について考察する。

(1) 自閉性障害のあるケースから

1) Sellin, B. (1993) *ich will kein innich meher sein*, Kiepenheuer & Witsch : 平野椰子訳 (1999) *もう闇のなかにはいたくない*, 草思社.

この本は Sellin が母親の援助による FC でタイピングによって日記のように日付順に書かれてある。彼は1973年2月生まれで、2歳のとき自閉症という診断を受けた。FCを開始したのは1990年8月からである。この本は彼が人差し指一本でタイピングするため、すべて文字は小文字でドットやコンマがない状態で書かれている。最初にタイピングされた文字は、1990年8月27日の文章で、

「abcdefghijklmnpqrstuvwyz birger papa jonasmama」で、自分の名前 birger, papa, それに、弟の jonas と mama という字が読み取れる。映像を見ると、Fig. 3の②の状態でタイピングをしており、母親の支援は必要であるが、常に触れる必要はなく、時々触れる程度の支援を行っている。そして、下あごを自傷行為のように手で打ちながらタイピングし、過呼吸をしながら絶叫し、横になりながら大声で泣く姿は、若林 (1973) と同様、書字からうかがえる内側と行動のギャップが著しい。取組み当初はミスタッチが多いが徐々に減っていった。彼の記述からは、本人の苦しみが強く出されている。1990年11月24日「かあさん 力を貸してくれ 文が書けるように うでを しつ狩(か)り ささえて 問題は ほくらが きちんと わかるように 書けるかどうかだ (中略) (平野卿子, 1999, p.28)」、11月29日「もっとちゃんと書けるようになったらすべてを語ろう まだそれには力不足だ もっとよく書けるようになりたい きょうはいつもよりヨナスとふたりでいるのがたのしい (中略) ヨナスは ほんとうにかわいい子だ だけどビルガーはだれよりも いい子なんだ ビルガーは ぜったいにすごくわるい息子なんかじゃない (前掲書, p.29)」。母親に対しても1991年2月20日「そんなふうにかあさんにえんえんとしゃべり続けられると 地獄の責め苦をうけているよう 悪いけど かあさんはまるでまちがっている (中略) 前提的な孤独のなかで生きるということがどんなものか 牢獄にいたりとか いわゆる独房とやらの監禁されるよりつらい ほくは孤独の海で溺れてしまう (前掲書, p.48)」。産出する文章は徐々に長くなり、哲学的な内容や社会批判まで、明確な意見を出せるようになる。1992年1月12日「けっこうな思いつきじゃないか 自閉症の原因を 耳がきこえるかどうかなどという 単純な問題に ひきおろしてしまうなんて ほくらはあらゆる場で感じすぎるんだ ほくはいささか聞きすぎ 見すぎる だが感覚器官は正常だ。ただあいにく心の内部に混乱がおきている 言葉文章 考え それらがばらばらになり ずたずたになっている ごくかんたんなことさえ 重要な現実の外界とのかかわりを断たれているのだ 考え それは心のなかのシステム同様まとめにくい (前掲書 p.87)」と述べている。

2) 落合・伊澤 (2000) 音声言語はないが STA (表出援助法) と FC によってコミュニケーションを行う 定時制高校一年生 K の事例, 特別研究報告 障害のある子どもの書字・描画における表出援助法に関する

研究, 国立特殊教育総合研究所, pp.21-28.

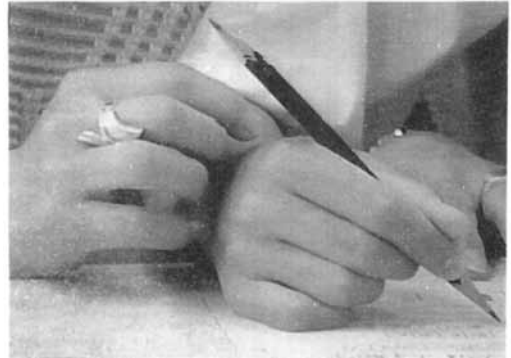


Fig. 5 事例 K が文章を書くときの介助状況 (落合・伊澤, 2000, p.23)

本児は、重度の自閉症であり、音声言語はなく、若林 (1973) の事例と同じく、いわゆる折れ線型自閉症タイプである。11歳8ヶ月から書字の練習が行われ、1ヶ月後には習字の「わたり書き」と手取り法を併用することによって、自ら書こうとする動きが出ている。指導経過は、若林 (1973) 論文と類似しているが、行動は Sellin (1993) と酷似しており、問題行動が多い事例であった。書字指導の1年後には母親が本児の手にちょっと触れるだけで「筆談」が可能になった。Fig. 5は、事例 K が支援ありでの書字の状況である。母親は K 児の手の甲にちょっと触れるだけで何の力



Fig. 6 事例 K が授業中に母親以外の介助者による指筆談で「発言」している (落合・伊澤, 2000, p.25)

も加えていない。Fig. 6は授業中に母親以外の介助者に腕を支えてもらい、授業中に机の上に指筆談で「発言」している場面である。本児は作業をする場合も支援者の接触が必要であった。Fig. 7は本児が鉢に草花を入れ替えるときに、介助者が本児の手に触れて仕事

を遂行している様子である。授業が終わった後に黒板のチョークの文字を消す場合、左右に消す面を移動する動作も、ちょっと触れると可能になった。母親の支援で中学校1年次に書いた作文は、彼独特の筆跡で書いている。「二年生になってやってみたいこと ぼくはいますぐにはたいへんです。からすようには行かない。たいへん強いから、きられてもへいきでいきい。いいえ。ぼくはこまるからいたずらをする。ですが、これがぼくのこころを落ち着かすのです。たいへんだといわれるとよけいにいたずらをしたと思うのです。ですから いいこになるには、かあさんといっしょにしなければなりませんから、へんなヘルパーさんはいらぬです。ですから、一人で学校へ行ってこようと思います。だから、お母さんはうちにいてほしいです。こんどはきちんと学校へ行ってこようと思います。いいことをしあうことをがんばりたいです。たいへん困ります。こんどはこまらないようにのん気におだやかはいいいことです。おこりんぼうをやめて、やさしい桜の花のようになりたい。いいことです。たいへんなことです。よいこになることを」と書いた。



Fig. 7 事例 K が授業中に母親以外の介助者による支援で作業をしている (落合・伊澤, 2000, p.26)

3) Biklen, D. (2005) Autism and the myth of the person alone; 鈴木真帆監訳 (2009)「自」らに「閉」じこもらない自閉症者たち, エスコアール出版部

この本では、FCを用いたインド、イギリス、イタリア、オーストラリア、アメリカの自閉症者7人に関するエスノグラフィーあるいはグラント・セオリー・アプローチによる記述を現象学的に省察したものである。7人に共通する項目として、自閉症という診断、過去に障害の程度が重く教育的に予後が悪い、あるいは知的な遅れがあるといわれた人々である。そして、全員が現在他者の支援なしでコミュニケーションが取れる。6人が初等教育時には特別支援教育制度内に在

籍し、2人が幼少期に単語や短文を鉛筆で書くことができ、1人がプラスチック製のアルファベットを並べて、コミュニケーションを行い、4人が指差しでコミュニケーション・ボードやキーボード入力でコミュニケーションが可能になった。彼らが決して孤独の人ではないこと、参加したいという思いがあること、能力を信じてもらいたいこと、感覚過敏のこと、失行症的な運動の課題があることを述べている。この本の著者らの幾人かが2009年5月に来日し講演会を開催した。このときは、それぞれがキーボードに向かってタイピングし、それを読み上げて答える方法であった。例えば、「どこから来ましたか?」という質問に対して、まずキーボードでカリフォルニアと打って、モニターに提示した文字を読んで/カリフォルニア/と答える方法である。

4) 東田・東田 (2005) この地球 (ほし) にすんでいる僕の仲間たちへ 12歳の僕が知っている自閉の世界, エスコアール出版部

介助付きコミュニケーションとの接点は抱っこ法 (阿部, 1988) の中の筆談援助法とよぶ方法であり、既に報告されていた事例があった (高橋, 1993, 田中・田中, 2001)。東田・東田 (2005) では、介助付きコミュニケーションの手続きはFCや表出援助法と同じで、この本に付属しているDVDでは、母親が彼の脚に触れた状態で自分でキーボードを打ち、原稿を書いている様子が映し出されている。本書では、自閉症児の特徴についての当事者からの意見が記載されている。「人の顔を見るときは、どの部分から見たらいいのか分からず少しだけそっと見ると、なんだか部分がバラバラな感じだけで、その人の顔が思い出せないのです。p.9」, 「聞いている言葉の内容が理解できているときでも、体をどう動かしたらいいのかわかりません。できないのではなくてわからないのです。(中略) 手や足は動くし自分の行きたいところには飛んでいくのに、何言ってるんだ。と言う人もいるかもしれません。僕らはまるで借りてきたロボットの中のように、いつも自分の体の中でもがき苦しんでいるのです。p.13」 「みんなは、自分の体のことをよくわかっているかもしれませんが、僕たちにとって手や足は、自分のものだという感覚が余りありません。p.27」最初の筆談について: 「僕は、びっくりしました。できるはずがないと考えていたのに、自分の思いが書けたのです。その時の気分は、真っ暗な闇の中からひとすじの光が、心の中に差し込んできたような感じでした (東田, 2012, p.15)。」 「僕はいくら練習しても。一文字

書いている間に何を書こうとしていたのか。わからなくなってしまうのです。それで、書くのではなく、指すことで言葉を表現する方法を母が考えてくれました。文字盤は、パソコンと同じキーボード並びのアルファベットを画用紙に書いたものです。これを見ながら、僕は忘れてしまう言葉を思い出します。この方法は、たとえばテレビに出ている俳優が誰かわからなくても、頭文字が出てくれば名前を思い出せる感じと似ています。文字盤を見ていると、気になる文字が目にとまるので、その文字が先頭となる単語を頭の中で羅列します。『い』が頭に位置する単語なら、『行く、今、急ぐ、意味、犬、いる』などです。その中で言いたかった言葉が見つかったら、文章の続きを思い出すことができます。このやり方で、僕は少しずつ、自力で思いを人に伝えられるようになりました。前掲書 p.22「自分が話せなかった頃、僕は透明人間のようにでした。確かに生きてはいますが、僕という人間はこの世界のどこにも存在していなかったのです。今は、自分の思いを伝えることができ、とても幸せです。前掲書 p.23」と述べている。東田 (2007) 自閉症の僕が跳びはねる理由 (エスコアール出版部) は、2013年に英訳され The Reason I Jump, Sceptre 社から出版され、30か国語に翻訳され世界的な注目を浴びた。現在、出版した書籍は20冊、絵本も5冊以上出版され、数々の賞を受賞している。

5) Kedar, I. (2013) *Ido in Autismland: Climbing Out of Autism's Silent Prison*: 入江真佐子訳 (2016) *自閉症のぼくが「ありがとう」をいえるまで*, 飛鳥新社。

1996年生まれの男性。2歳8ヶ月で重度自閉症と診断され、3歳から行動療法が行われた。メンタル・セラピストの母親との書字がきっかけであった。この本から引用すると「七歳のとき変化があった。お母さんと一緒にすわって、誕生日パーティーの招待状を作っていた。字を書けるように、お母さんはぼくの手を支えていた。ぼくはお母さんの手の下で字をつづっていた。ふと、お母さんはぼくの手が勝手に動いているのを感じとり、ということはこの子は字を書けるんだと気づいた。ぼくたちは一緒に書いた (前掲書, p.39。)」としている。書字の様子はホームページ (<http://idoinautismland.com>) からみることができる。Rapid Prompting とよばれる FC と類似している方法が行われており、最終的には文字盤やタブレットコンピューターに指差し、コミュニケーションができるようになるものである。学習場面でも文字盤の指差しを行いな

がら単語を覚える取組みを行う。音声言語がなく書字ができない重度の自閉症に対して、一般の文字指導の場面のように行うが、書字や音声での回答の代わりに、人差し指で文字ボードをさしながら単語を覚えていく方法である。そして、自分の行動の特徴について以下のように述べている。「ぼくの身体はたいへんだ。落ち着きがないだけでなく、いうことを聞いてくれない。(中略) 手がまるで野球のミットのようで、指はバナナのようだ。頭ではなにをしたいかがわかっているのに、指が言うことをきかない (前掲書, p.32。)」 「細かい動きだけじゃない。大きな動きものろのろとしかできない (前掲書, p.33。)」 「目を閉じると、自分の身体がどこにあるのかよくわからなくなる。手の位置を知るためには、手を見なきゃならない。目を開けて、自分の身体が思っていたのとはちがうところにあるのを見るとぎょっとする。」 (中略) 「理解できないんじゃない。頭がそんなことを思ってもいないのに、身体が勝手に動いてしまうんだ (前掲書, p.35。)」 「ものを考えるとき、頭の中では単語のアルファベットのつづりが流れていた。一文全体とか、それ以上長い文章を頭の中に浮かべることができた。いままでは同時にその言葉の発音も聞こえる (前掲書, p.70。)」 また真贋論争で話題になった、科学的根拠として議論される結果の反復可能性や恒常性については「ぼくはだれとでも文字盤を使えるわけじゃない。『なぜ相手を選ぶのか』といふかられることもある。自閉症者のコミュニケーションで大切なのは『信頼』だ。つまりこういうことだ。その人といてリラックスできるなら、ぼくは文字盤を指す。相手がすごく気が短かったり、ぼくをテストしているみたいだったり、本人にそんなつもりはなくてもぼくに向かって上から目線でしゃべったりすると、ぼくは文字盤を使うことをやめてしまう。ぼく自身の不安のせいでそうなることもある (前掲書, p.90。)」 と述べている。タイピングを行う前からさまざまなことを既に理解しており、それを言葉に出すことができないだけで、教育場面では年齢相当の内容と対応してもらっていたかったとしている。

(2) 肢体不自由あるいは重複障害といわれたケースについて

1) 永田・落合 (1994) 重度肢体不自由児の表現行為を促すための総合的アプローチ (2), 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集 pp.346-347.

K.M 児: 低体重・肺炎腫・脳性まひを併せもつ重複障害児と診断されていた男児に対して、表出援助法

を行った。取組み当初、問いかけに対して Yes の意味のときは、声は出ないが口を大きく開けて／ハイ／と答え、No は／ブー／と口唇を振動させて音を出して答えることができた。重複障害特別支援学校小学部では文字指導を受け、10歳から公立小学校肢体不自由特別支援学級に在籍し、訓練以外は多くの時間を通常の学級で過ごした。教員による支援を得ながら通常の学級の中での授業に参加していた。その後特別支援学校に転校した。書字は支援なしでは不可能だが、透明プラスチックカバーを付けたキーボードによるパソコン入力へと移行した。重度の肢体不自由をもつ人の場合、完全に自分で書字をし、タイピングできるようになるのは難しく、最後まで介助が必要である。

2) 落合俊郎 (1994) 描画・書字における表出援助法の工夫について. 国立特殊教育総合研究所紀要第20巻, 国立特殊教育総合研究所, pp.9-15.

SS: 重複障害児と診断された男児である。生後3か月から県立こども医療センターで、PT、OTの訓練を受け、2歳6か月から7歳まで、国立特殊教育総合研究所で月一回教育相談を受け、3歳から知的障害通園施設に通園し、4歳から通常の保育所で統合保育を行い、6歳時で独歩が可能になった。4歳10か月から表出援助法の訓練を受け、援助ありの状態では書字や描画が可能になった。Fig. 8はSS児が自力で描画が可能になる直前の絵である(6歳時)、左側が自力で描いた絵で、右側が援助付きで描いた絵である。上段はタクシー、下段は電車を描いた。それぞれの絵を左右比較してみると、上段のタクシーでは絵を構成する要素はほぼ描けているが、触れることによって「正しく」描かれている。下段の電車の絵に対しても同様のことが言えるのではないか。

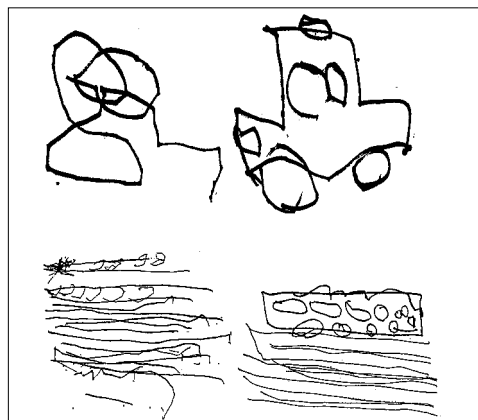


Fig. 8 表出援助法による描画, 左が援助なし, 右側が援助ありの描画 (落合, 1995, p.115)

3. 真贋論争

(1) 1990年代の論争

これら介助付きコミュニケーションに関する議論やファシリテーションによる書字や描画に関係する諸方法は、肯定的にも否定的にも、大きな議論があった。最初に起きた議論は、FCに対するものである。FCの有効性については、オーストラリアやアメリカ合衆国において、障害児の指導方法としては異例と言われるほど、賛否両論の側から裁判が起こされた。FCがコミュニケーションに使用可能であるかどうか実証できないとする研究を含む数多くの実験的、観察的研究が出されている。これらの研究のなかにも、それぞれの事例は介助者の影響を受け、介助者から手がかりを得ていて、産出される言葉は介助者のものであり、障害者自身のものではないとする知見がある。他の研究では、ファシリテーションを用いて障害児自身の考え方を伝えられる可能性があることを確認した研究もある。しかし、例えば、あるテスト場面では、不適切な回答を出す、別のテスト場面では、正しい答を出している。この方法の基本要因の難しい課題のいくつかは、対象児のコミュニケーション能力や障害特性、例えば自閉症等の人間関係に大きな影響を受ける対象者であるなどの条件のばらつきと関係するものであり、この方法自身の経験不足と介助者の経験不足とも関係しているであろうとされた (落合, 1995, pp.82-86)。

Goode (1994) は、FCに批判的な態度を取りながらも、自分の経験から、脳性まひ児のように運動に障害がある子どもには有効ではないかと述べ、盲聾二重障害児のコミュニケーションにも適切であろうとしている。

(2) 2000年以降の論争: 滝本・石井 (2002) 異議あり! 「奇跡の詩人」 同時代社から

著者の一人、落合とも関係する論争がこの本で述べられている。この本は、2002年4月28日に放送されたNHKスペシャル「奇跡の詩人」に対する批判がきっかけであった。ドーマン法に対する疑問、特にその訓練法に対する批判、ドーマン法とFCとの関係、FCに対する米国学会での批判が紹介されている。また、取組み当初と放映されたときの支援方法に対して、間接化が進んでいないことに関して「FCを紹介する落合論文とは全く異なるからである。」(p.125) や「先に述べた落合が指摘するFCとは、完全に正反対の方向ではなからうか。」(p.144) と述べている。さらに、毛塚 (2004) が科学的検証方法についての疑問、対象者のもつ能力に対する疑問、介助者の代弁で、介助者

との共同行為であるとして否定的な立場をとっている。滝本・石井 (2002) による書籍に名前が記載された落合にもマスコミや SNS による批判があり、さらには日本聴能言語士協会 (2003) によって「FC に対する批判的見解」(日本聴能言語士協会会報第27巻第3号 pp.1-2) に名前を明記され批判された。そして、介助付きコミュニケーションの研究や発表に大きなブレイキがかかった。

IV. まとめと考察

介助付きコミュニケーションに対する国内での大規模な真贋論争は、滝本・石井 (2002) の著書から始まったといってよいだろう。まずはじめに、さまざまな批判が2つの方法を抱き合わせた流れで議論しているので、表出援助法などの介助付きコミュニケーションとドーマン法との方法論的關係は、まったくないと言っておこう。これらの真贋論争は、介助付きコミュニケーションのどの段階でチェックされるのかによっても議論の展開が異なるのではない。例えば、Fig. 3の①の段階では、観察者からは疑問視する意見が多いに違いない。Fig. 3の②の段階、Sellin が母親からこの状態を時々支えてもらう状態から、母親が複雑な文章を書かせることは可能であろうか。さらに③や④の段階になればほとんどの人は信じるかも知れない。①の段階で否定され、取組みが中止されてしまうと、現在の東田氏のように誰の介助も受けず文字盤を指差したり、キーボードで会話したり文章を書いたりするまでに到達することができず、成果が現れなくなる心配も出てくる。しかし、「自立」までに非常に長い時間がかかること、重度の脳性まひが伴う場合、介助から離れることが難しいのが事実である。介助付きコミュニケーションを重度の自閉症スペクトラムの人に应用するとき、多くは母親に限定されたり、可能な日と不可能な日があったりするなど、一般化が難しいことと、その効果が現れるのに、数年以上かかる場合があるという問題がある。真贋論争をふまえて、なるべく複数の介助者によって同じ効果があるかを常に確かめる、日常生活で介助者の手の平や、机の上に、人差し指で書く指筆談をしても、紙やデータで残るものにしていくということを心がけるようにした。このことについては、2003年5月17日、NHK 教育で放送された「ETV スペシャル あなたとはなしたい～障害者と向き合う医療・教育最前線～」において説明されている。FCの歴史の中でも、Crossley はオーストラリアで、

Biklen は米国で、それぞれ真贋論争の洗礼を浴びていて、Crossley (1993) p.138での「5. 過大解釈をしないこと」「6. 対象者が述べたことを全て信じてはいけない」という項目が出てきたのではない。また、若林 (1973) をはじめ、他の研究者が述べているように、著しい問題行動や不適応行動を示しながら、書字やタイピングではすばらしい文章を書くという内的世界と観察できる行動の著しい差異から、結果に対する不信感を持ってしまうということであろう。

自閉症の定義としては、「自閉症とは、3歳位までに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害であり、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。」とされている。最近ではこれに加えて、彼らの感覚過敏や運動の問題が言われ始めてきた。しかし、Oppenheim は既に1974年にこのことについて述べており、本稿で引用した論文でも当事者たちが同様のことを記述している。

音声言語がないほど「重度」の自閉症のある人々が自分の状況を述べる内容は注目すべきである。Oppenheim (1974) では介助者に触れてもらって、自分がどのように書字するか気がつくとか、東田・東田 (2005) は自分の体は「まるで借りてきたロボットの中にいるように、いつも自分の体の中でもがき苦しんでいるのです」と述べ、Kedar (2013) は「目を閉じると、自分の身体がどこにあるのかよくわからなくなる。手の位置を知るためには、手を見なきゃならない。目を開けて、自分の身体が思っていたのとはちがうところにあるのを見るとぎょっとする。」という。もちろん若林 (1973) のケースのように「さわってもらいと安心していれる」こともあろう。Kedar (2013) がタブレットパソコンの画面に左手でポインティングしながら、右手で母親の手を握っている映像も同様な意味があるだろう。介助付きコミュニケーションによって伝達のためのコミュニケーションを文字で行う彼らの思考についても興味深い現象を示してくれる。我々は音声言語を使用するため、思考は音声言語の内言で行う。音声言語を理解するが、表出言語が文字の彼らの思考はどのような構造になっているのだろうか。東田・東田 (2005) も Kedar (2013) も文字による思考について述べている。また、東田・東田 (2005) が述べているように「自分が話せなかった頃、僕は透明人間のようなものでした。確かに生きてはいますが、僕という人間はこの世界のどこにも存在していなかったので

す。」は、他の著者も類似した内容を述べている。まさにランゲージ／ラング／パロールの連鎖的發展が、介助付きコミュニケーション法によって促進されたパロールによって歯車が回り始めたと言えないだろうか。

手による介助だけでなく、さまざまな展開が行われている。柴田 (2012, 2015) は手による介助をしながら、筆談、指筆談、2スイッチワープロとブッシュ式スイッチを行い、脳性まひ等の重度の肢体不自由のある人々20人以上の「言葉」を紹介している。重度の肢体不自由がある場合、介助の間接化は難しく、介助なしでコミュニケーションができることは非常に困難である。さまざまなデバイスを使用しても人の手による介助が必要である。

批判に対して、中村 (2013) は「個別の例から全体を推測するのは帰納法だが、ひとつの事例だけで一般的な原理を引き出すことはできない。しかし裏返して言えば、複数の事例を検討すれば、帰納法的推論は成り立つ。であるなら、ほかに類似のケースがないかどうか、調査し検討するのは意味のあることだろう。」(p.188) としている。今、介助付きコミュニケーション法の歴史をさかのぼって考察し、さまざまな事例の中に真実が含まれており、完全な否定はできないといえるのではないか。

落合が真贋論争に巻き込まれ、学界からも名指して批判されたことから、教育相談では行っていたが、学会や研究紀要での発表は控えていた。しかし、今、人権論から議論を展開した要田氏、肢体不自由を伴う重複障害者に長く関わっている柴田氏、大学院生時代からの共同研究者である河野氏、東田氏を育てた鈴木氏による筆談援助の会、2000年に終了した国立特殊教育総合研究所の研究を深化・拡大した中村氏に深く感謝する。そして、このような研究の復活は東田氏とその母親の功績によるものであると確信する。記して心から感謝する。

文 献

阿部秀雄 (1988) 自閉症児のための抱っこ法入門 (障害児教育指導技術双書). 学習研究社.
 Biklen, D. (1993) *Communication unbound*. Teachers College Press, New York.
 Goode, G. D. (1994) Defining facilitated communication in and out of existence: Role of science in the facilitated communication controversy. *Mental Retardation*, 32,

307-311.

東田直樹 (2007) 自閉症の僕が跳びはねる理由. エスコアール出版部, Davit Mitchell 訳 (2013) *The Reason I Jump*, Sceptre.
 東田直樹 (2012) 風になる. ビックイシュー日本.
 東田直樹・東田美紀 (2005) この地球 (ほし) にすんでいる僕の仲間たちへ 12歳の僕が知っている自閉の世界. (エスコアール出版部).
 筆談援助の会編 (2008) 言えない気持ちを伝えたい 発達障害がある人へのコミュニケーションを支援する筆談援助. エスコアール出版部.
 石井聖 (1993) 「自閉」を越えて. 学苑社.
 片倉信夫 (1992) 筆談自閉症. 発達協会誌.
 片倉信夫 (1994) 僕が自閉語を話すわけ. 学苑社.
 Kedar, I. (2013) *Ido in autismland: Climbing out of autism's silent prison*. 入江真佐子訳 (2016) 自閉症のほくが「ありがとう」をいえるまで. 飛鳥新社.
 毛塚恵美子 (2004) Facilitated Communication—コミュニケーション支援か幻想か?—, 発達障害研究, 25, 4, pp.289-299.
 河野哲也 (2015) 現象学的身体論と特別支援教育 インクルーシブ社会の哲学的探求. 北大路書房.
 永田和子・落合俊郎 (1994) 重度肢体不自由児の表現行為を促すための総合的アプローチ (2). 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 346-347.
 中村尚樹 (2013) 最重度の障害児たちが語りはじめるとき. 草思社.
 落合俊郎 (1995) Facilitationによる書字、描画の諸方法、特別研究報告書 心身障害児の運動障害にみられる課題とその指導に関する研究. 国立特殊教育総合研究所.
 落合俊郎・久田信行 (1992) 表出援助の方法をめぐって (1) —書字6描画の援助を通して—. 日本特殊教育学会第30回大会発表論文集, 334-335.
 落合俊郎 (1993) 描画・書字における表出援助法の工夫について. 国立特殊教育総合研究所紀要, 20, 9-15.
 落合俊郎・伊澤絹子 (2000) 音声言語はないがSTA(表出援助法)とFCによってコミュニケーションを行う定時制高校一年生Kの事例. 特別研究報告 障害のある子どもの書字・描画における表出援助法に関する研究, 21-28.
 柴田保之 (2012) みんな言葉を持っていた —障害の重い人たちの心の世界—. オクムラ書店.
 柴田保之 (2015) 沈黙を超えて, 萬書房.

高橋秀敏 (1993) 特別発表「レット症候群の未央ちゃんとの抱っこ」第2回抱っこ法研究会報告集, 4-8.
滝本太郎・石井謙一郎 (2002) 異議あり! 「奇跡の詩人」. 同時代社.
田中香穂子・田中美津穂 (2001) 自閉症児・美津穂の願い 手のひらのメッセージ. たけしま出版.
要田洋江 (2008) 重度「知的障害」者と呼ばれる人びとへのコミュニケーション支援に関する一研究一

ファシリテイトド・コミュニケーション (筆談支援) 利用者の社会的障壁一, 生活科学研究誌, 7, (人間福祉分野), 71-101.

要田洋江 (2014) 「知的障害」概念の脱構築一筆談援助法 (FC) 利用の社会的障壁と専門科学一. 人権問題研究, 14, 187-252.

(2017. 2. 3受理)

The Comparative Study of Facilitated Communication (FC) and Soft Touching Assistance: To Confirm the Effectiveness as a Communication Method for Students with Physical and Multiple Disabilities

Toshiro OCHIAI

Yamato University Faculty of Education

Kosaku KOBATA

Yamato University Faculty of Education

Kazuhisa INOUE

Yamato University Faculty of Education

The special TV program of NHK Education in August, 2014 “What you taught me about my son.” won the Grand Prize on the television documentary section at the Art Festival organized by the Agency for Cultural Affairs in fiscal year 2014. The picture in the program showed that Mr. Higashida was non-verbal and had very severe disability of Autism, but able to communicate with pointing a communication board or typing letters on the key board to his PC. The picture showed just today’s situation of him, but it was not known that there was the long process with big efforts and anguish by him and his mother. There were many non-verbal children who can communicate with assisted method: Facilitated Communication (FC), Soft Touching Assistance and Assisted Writing Conversation Method, etc. However, there were very severe arguments about authenticity of these methods in terms of authorship, because boys and girls are not able to communicate without support.

It was reviewed these methods in terms of historical review and possibilities of effectiveness for the support method for children with physical disabilities or multiple disabilities as well as autism.

Keywords: Facilitated Communication, soft touching assistance, autism, physical disability, multiple disabilities